

第5章 結論

5-1 まちを親しむ手段としての路上観察

本研究では路上観察を行う市民団体を対象として、その活動の記録および会員からの聞き取り調査により、路上観察が個人にどのような影響を与えているか、また個人の環境認識に与える変化を読み取ることを目的として調査・分析を行った。

ところでまち歩きにおけるまちの認識について、八尾は以下のように述べている。

「視覚的感觉によって得られた情報を価値観のフィルターに通して解釈することは、空間的要素が認識されているに過ぎない。空間の変化や、そこに存在する人間の要素などが入ってくるまち認識が、本当の意味でのまち認識といえるのではないだろうか」¹⁾。つまりまちを本当に「認識」するということはまちにおける様々な要素を知覚し、自分の中にとりこむことである。このように「自分の中にとりこむ」ことを効果的に促進させるため、環境学習におけるまち歩きの中にはある「仕掛け」を仕込み、楽しく歩く工夫を凝らしているものがある。

例えば、人間の五感を活用して、子どもに音やにおいの知覚環境を地図に表現させる。²⁾ 音やにおいを採集するために子どもは積極的に耳をすまし、におう。実際に身体で感じるものであれば、その認識は直接的であり自分の中にとりこみやすい。

「名づけ」もまち歩きを楽しむ仕掛けの一つである。目に入ったものや気になったものに名前をつけるために、頭を働かせながらまちを歩く。そこには対象を見つける楽しみ、名前をつける楽しみがある。さらにその名前を他のひとと共有したり、披露する場があることは一層名づけを活性化させる。本研究で取り上げた『なにわ町方あきんど会』はこの効果があらわれている市民団体である。

5-2 分析結果から見る路上観察の効果

ここでは引札の分析結果および聞き取り調査から路上観察の効果について考察を加える。路上観察および名づけ行為が個人に与える変化についても考察する。

5-2-1 引札の分析結果

1. 場所

引札は偶然見つけるものも多いため、特に個人の仕入れ場所は広範囲である。この場所の広がり、会員がどこにいても名づけを意識した路上観察をしていることのあらわれである。なお集団の仕入れではあらかじめ決めた場所で行われるため、その場所に対する知識がある場合がある。また集団で名づけを行うため、互いに発想に影響を与えあうことも考えられる。今回仕入れの形態（個人／集団）は出来なかったが、一つの対象に対し複数

名付けがなされる「名づけ返し」に関しても分析の余地がある。

2. 対象物

引札の対象物の分析より、「人工物」が最も引札の対象になることが分かった。このことから、まちなかで目をひくものには人工物が多いということが分かる。また「公共物」「景色／雰囲気」「建物」についても同様のことがいえる。個人の引札もこの順位に従うことがほとんどであるが、人によっては別の特定の対象物に注目しやすい傾向が見られる場合もある。（例：Cさんは「人工物」の次に「有機物」の報告が多い。）なお活動を重ねるにつれて、ものの見方が広がり、対象物の種類が増えるという仮説をたてていたが、これまでの活動年の中ごろに一番対象物の種類が多い人がいるなど、この仮説は成り立たないことが分かった。さらに枚数が多い年であるといって対象物の種類が多いとも限らず、引札になりやすい対象物が特徴としてあらわれる場合もみられる。

このことから対象物は全体として「人工物」「公共物」「景色／雰囲気」「建物」が引札の対象になりやすいことが分かるが、個人に関しては必ずしもこの傾向に従わない場合もある。対象物の種類は活動を重ねるにつれ増加するとは言えない。

3. 対象物のとらえ方

引札の対象物のとらえ方の分析より、「点資源（全体）」のとらえ方が最も多いことが分かった。これは分析した個人に関してもすべての人に当てはまった。また、活動を重ねるにつれて、「点資源（部分）」のとらえ方が増え、視点が細やかになるという仮説を立てたが、そのような傾向はどの個人にも見られず、この仮説は成り立たなかった。このことから引札の対象は広がりのある面資源や線資源よりも単独で存在している点資源の全体に注目されやすいことが分かった。

4. クロス集計（対象物のとらえ方×名前の要素）

引札の「対象物のとらえ方」と「名前の要素」について個人でクロス集計を行ったが、検定結果からこの2つの間に関係が見られたのは40のクロス集計のうち1つのみ（Yさんの1998年の結果のみ）であったため、この2つの間には関係があるとは言えない結果になった。このことから対象物のとらえ方と名前の要素には関係があるとは言えないことが分かった。よって「ある特定の対象物に対してはこのようなとらえ方が見られる」といった傾向はみられないことが分かった。

5-2-2 聞き取り調査の分析結果

仕入れや名づけに関して 8 人の会員に対し聞き取り調査を行った結果を分析し、考察した。以下は質問項目である。

- ① まち歩き活動を続けていて、何か注目するものができましたか。
- ② 普段、どんな時に仕入れに行きますか。
- ③ まち歩きを始めてから、日常生活で変化したことはありますか。
- ④ 活動を重ねていくうちに、ものごとに対して見方が変わったことはありますか。
- ⑤ 一度引札にしたものを、あとから再び見に行ったり仕入れたことはありますか。
- ⑥ 他の人が名づけたものの名前や、その対象物を覚えていますか。

1.①の回答より

この問いに対する答えは 4 人が「できた」、4 人が「特にない」という結果だった。「できた」という答えの人はそれぞれ「建物や看板」「狛犬」「町並や碑」「街灯」と具体的な回答が得られた。注目するものの有無は個人によって異なることが分かった。

2.②の回答より

「いつでも、どんな時でも」「道を歩いているとき」といった回答が多かった。カメラがなかったらあきらめる、近くならもう一度行くという回答もあった。このことから、個人の仕入れは、仕入れにわざわざ行くのではなく普段の生活の中で見つけた時が仕入れの時であることが分かった。

3.③の回答より

「よくまわりを見るようになった」「名づけをついつい考えてしまう」という回答が半数ずつ見られた。これはいずれも路上観察と名づけの効果だと考えられる。

4.④の回答より

「変わった」あるいは具体的に注目するものを挙げる回答がほぼ全員から得られた。多角的なものの見方、拡大解釈、いままで見過ごしていたものに気付くようになった、などこれは 3 と同様路上観察と名づけの効果だと考えられる。

5.⑤の回答より

わざわざ見に行くことはしないが、同じものでも何度か見ると名づけが変わることがあ

るという回答が多い。「名づけ」がものに対する見方に効果的に影響を与えていると考えられる。

6.⑥の回答より

「覚えていない」という回答が 3 人、「覚えていることもある」「インパクトのあるものは覚えているものもある」という回答が 5 人であった。このことから「名づけ」は、付けられた名前よりも自分自身が名づけることが個人に与える意味を持つと考えられる。

5-3 路上観察の今後の展望

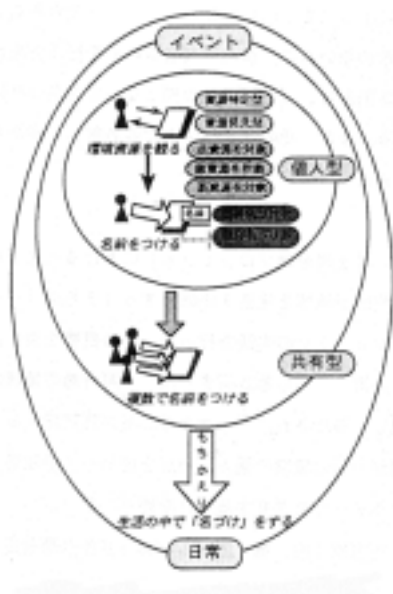


図 5-1 は吉岡による「《名づけ》の過程と分類の視点」³⁾の図である。あきんど会は個人の名づけと集団の名づけ（図中ではイベント）を行っている。集団で仕入れをする時はひとつの対象物を集団で名づけ、集団で対象物を共有することができる。個人での仕入れに関しては報告された対象物が機関誌『まちなど』に掲載することで他の会員にも伝わり、紙面上で情報を共有できる。このように路上観察でさまざまなものを見つけ、名づけることで対象を自分のなかに取り込み、まちに対して親しみを抱くことができる。この効果を期待したまちづくりイベントは多く存在する。しかし人間が環境に対し本

図 5-1 《名づけ》の過程と分類の視点 イベントのような一過性のものでは続いていかない。あきんど会の活動を通じて会員は個人レベルでの環境認識を高めている。それは個人の活動と集団での活動の両方の効果によるものだと考えられる。なぜなら引札の魅力というのは人と共有して親しまれることによって楽しみを感じる点にあるからである。

本研究は「名づけ」を仕掛けに持つ路上観察の効果を検証したが、路上観察を効果的に環境認識の手段として活用する方法は「名づけ」だけにとどまらない。考現学を提唱した今和次郎が関東大震災のバラックをスケッチして得ようとしたものは、眼前の「現在の姿」である。あきんど会の引札にも様々な種類のものがあり、建物など常に動かずにその場所にあるものを対象にしたものもあれば、サッカーをする少年たちのように「その瞬間」を対象としたものもある。そのような瞬間的なものは引札にすることによって名づけたひとつの中に記憶として残り、自分の中にとりこまれる。路上観察によって出会うさまざまな現象を記録し、自らの一部にすることで私達は一層自分のまわりの環境に対し親しみを抱き、

日常を楽しむことができる。路上観察をくり返し行うことは効果的に環境認識を深めることにつながる。

人間と環境とのかかわりを再認識するためには身近な環境をよく見る「見方」を会得することが第一歩ではないだろうか。今後路上観察の魅力が広く伝わり、路上観察の活動が盛んになれば個人の環境に対する見方・ものの見方がより深まることが期待できる。そのように路上観察が今一度見直されることはひとにとって、また、まちにとっても重要である。

[参考文献および引用文献]

-
- ¹⁾ 八尾哲史:地図遊びとまち歩きを通したまち環境学習に関する研究,大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻修士論文,p32 (1990)
 - ²⁾ 寺本潔:子どもの知覚環境 遊び・地図・原風景をめぐる研究,地人書房 (1997)
 - ³⁾ 吉岡哲:環境計画における《名づけ》概念の考察と手法化に関する研究,大阪大学大学院環境工学専攻修士論文,p74 (1994)